



座長・受賞者同士でねぎらい合い、笑顔で締めくくった

介護付き有料老人ホーム「ゆゆうの里」を全国7カ所で運営する一般財団法人日本老人福祉財団（中央区、小口明彦理事長）は2月21日、日本橋公会堂（東京都中央区）にて職員による実践研究発表会を開催した。

1973年に設立された同財団は、浜松・伊豆高原・神戸・湯河原・大阪・佐倉・京都の7カ所で「ゆゆうの里」を運営し、浜松以外は診療所も併設している。各施設と本部は日々の業務と並行して実践研究を行い、現場の課題解決に取り組んでいる。今年度は50件の研究が報告され、施設内発表会を通過した20件が発表となった。

## 広告

冒頭の挨拶で小口明彦理事長は「昨年、財団は創立50周年を迎えた。次の100年に向けて、第一歩を踏



白熱する会場

み出す時が来た。この職員実践研究発表会はその契機になる」と述べた。続いて20の研究が発表され、8名の審査員による4つの優秀賞と、参加者の投票による会場賞が表彰された。

優秀賞の1つ「介護のデジタル化で入居者QOLと職員の働きやすさが向上」見守りライフの導入は、左倉ゆうゆうの里をパイロット施設に選定して「見守りライフ」を1号台導入した事例を紹介。夜間の安否確認のための訪室回数

## 優秀賞は「介護のデジタル化で入居者QOLと職員の働きやすさが向上」ほか

が38件から10件に減少し、職員・入居者の負担が軽減された。また、入居者の睡眠状態が可視化されたことで、ケアプランの見直しを行うなど、科学的介護の範例を示した。

同じく優秀賞に選ばれた「ゆゆうdeよろよろ」——入居者の『やりたい』を形に5年間の試み（伊豆高原・ケアサービス課）

●「介護のデジタル化で入居者QOLと職員の働きやすさが向上」——見守りライフの導入（佐倉・ケアサービス課）

●早期離職は防げる！——3年定着率を上げる仲間づくり（本部・人事総務部）

●「私だって参加したい！」——新企画『かたつむりツアー』（大阪・生活サービス課）

審査員による講評では、山梨大学生命環境学部・西久保浩二教授は「現場の実践研究で得た知見を法人全体で共有し、魅力のある職場を作してほしい」と講評。西武文理大学サービス経営学部・影山優子教授は「高齢者の生活を包括的に支えていることが分かる。この実践研究は高齢者介護の希望の光だ」とエールを送った。

小野信夫理事は「今日の参加者は135人と、コロナ禍前の水準だ。次の100年の第一歩にふさわしい。今後の財団の実践研究活動に期待してほしい」と閉会の挨拶を述べた。

### 【優秀賞】

- 「ゆゆうdeよろよろ！——入居者の『やりたい』を形に5年間の試み（浜松・生活サービス課）
- なぜ内出血ができてしまうのか？——内出血を防ぐためにできること（伊豆高原・ケアサービス課）
- 介護のデジタル化で入居者QOLと職員の働きやすさが向上——見守りライフの導入（佐倉・ケアサービス課）
- 早期離職は防げる！——3年定着率を上げる仲間づくり（本部・人事総務部）

### 【会場賞】

- 「私だって参加したい！」——新企画『かたつむりツアー』（大阪・生活サービス課）



一般財団法人 日本老人福祉財団

03-3662-3611